

このページは、2026年4/25に開催される哲学カフェ：大江健三郎『セヴンティーン』に、ご参加される方向けです。

募集要項にも記載しました通り、『セヴンティーン』には、続篇『政治少年死す（セヴンティーン第二部）』が存在しますが、長年、封印状態で入手困難になっております。

この第二部をお読みになっていない方も、ご参加いただけるように、「あらすじ」（要約）を主宰藤澤が作成しましたので、当日までに、御一読ください。

※以下、『セヴンティーン』自体をお読みなつた後でお読みください。

（ネタバレあり）

《承前》

『政治少年死す（セヴンティーン第二部）』

左翼学生の反政府運動が失敗に終わり、国会前で、ひとりの女学生が死んだ日。

「おれ」は強姦者のオルガズムに満たされた。

しかし、それも一時のことだ。

皇道党での右翼活動ですら、自身の満足を満たせなくなってきた。

そんな中、党内の討論の折に、出会った安西繁の「クーデター論」に感銘を受け、彼と親しくなる。

安西には、天皇はいない。

安西は戦没学生たちの魂と連帯しようとする男だ。

それはそれでいい。

「ああ、天皇はおれ独りの神であったほうがいい、さもないとおれは安西繁に嫉妬することだろう！」（56頁）

しかし、皇道党の長老たち、総裁逆木原のやり方は生ぬるいのだ。

もはや逆木原という媒介は必要ない。

おれは、直接、天皇陛下とつながりたいのだ。

そんな中、「おれ」は、8月の広島原爆の日に、左翼のデモ隊を蹴散らすため、広島の地に、青年行動隊員として降り立った。

広島街頭で、左翼学生の集団と派手な乱闘を演じる。

広島からの帰路

おれは自問する。

おれの使命とは何だ？

クーデターといっても俺には防衛大学校に入る力はないのだ。

そんなとき、「啓示」が下りたのだ。

車窓から見る夕暮れの海

そこに「純粹天皇」の姿を見たのだ。

私心なき忠で、日本を最も毒するものを刺すのだ！

「おれは小さな個々の勃起とオルガズムとを今や軽蔑して、おれは啓示どおり、おれの全生命を賭けた大勃起、大オルガズムとに向かって精液と性エネルギーをたくわえていたのだろう」(76頁)

そして遂に「おれ」はやった、殺ったのだ。

あの売国奴の「委員長」は斃れ、俺はいまたくさんのおれたちに壇上で組み伏せられている。

おれは妙に親しげで、優しく親切な公安警察官の取り調べを連日受けていた。

背後関係を追及され、おれはこう答えた

「強いていえば天皇の幻影が私の唯一の共犯なんです、いつも天皇の幻影に私はみちびかれます。(中略) 天皇が私の共犯です、私の背後関係の糸は天皇だけにつながっています。」

(91頁)

公安警察官は、仮面を脱ぎ捨て激昂した

おれは死刑執行場に連れていかれる心持でいたが、現実には東京少年鑑別所だ。

おれは独房で考えた。

暗殺は通過儀礼に過ぎない。旅券申請だ。

生きてどうする？

老醜をさらすだけだ。

すぐに暗殺のことなど大衆に忘れられる。

「おれ個人の恐怖にみちた魂を棄てて純粹天皇の偉大な溶鉱炉のなかに跳びこむことだ
そのあとに不安なき選ばれたる者の恍惚がおとずれる、恒常のオルガズムがおとずれる」

(94-95 頁)

そしておれは、逝ったのだ。

首をくくったのだ。

絞殺体をひきずりおろした中年の警官は精液の匂いをかいだという…

(97 頁)

【了】

引用文献

『大江健三郎全小説 3』講談社、2018 年。